

## 【記憶の中の、ウズベクの心躍る地名など】

サマルカンド(颶秣建土)、ソグディアナ、アフラシャブの丘、ホラズム、ウルゲンチ、ブハラ、ティムール帝、ビビ・ハヌム妃、ジャハンギール、ウルグ・ベク天文台、フェルガナ、ヒヴァ、イチャン・カラ、アズヤ・カラ、レギスタン広場、ザラフシャン、シャフリサブス、テルメズ、グル・エミール廟、サマルカンド・ブルー、(以上、順不動にての。)

不思議なもので、40年ほど昔の記憶が、現地を歩きながら、次々に甦えってきました。

～「個人投稿」ですが、ここで、「関東支部」お願いを～

## 【次回2026年版では、印刷版・Web版とも、「関東」にも場を】

OB会誌「やまざと」は、2024年版から、印刷・郵送配付版とWeb閲覧版となされました。その原稿募集2024/9/2メールでは、印刷版用として、「東海」「関西」支部については各1頁の割当てとする旨の指示がありました(「関東」戻)。そこで、追って、次回には「関東」もぜひに。とお願いしたもの、2025/9/1の、OB会長ご発信「原稿募集」メールでも、残念なことに、以前同様(「関東」戻)でした。来年版では、「関東」も採択を。なお、印刷版内でも、その不均衡が気になります。「関西」は1つのPWが各3行の記載。「個人投稿」ページでは、1行おきの7件記載で、それでもページが空いてしまい、無関係の写真も。(今年版も同様か?)当時、同期の方とは、「どの支部にかかわらず、PW 1件は少なくとも5行に」と。そうして貰えば、ページがかなり空くので、そこには最近の金大の話題などを、などと。(僭越ながら、その話題集めなどは、小生が如何ほどにでも、とまでは言いませんでしたが、さて。)

## 近年の外国での記憶から：承前(2015年の30号から続けての連載11回)

### 憧憬のウズベク — 大昔のNHK-TV「シルクロード/草原の王都」の地、サマルカンド、ブハラなどへ

11期 長岡 正利

本誌・昨年号までに続いて、今回も、近年の外国での写真等を中心に紹介させて頂きます。

昭和55(1980)に始まったNHK-TV「シルクロード」は好評の中に続き、1983年からは、「第2部/ローマへの道」として、中国からインド(ラダック)へ。更にイラン、イラクと、西へ。禁断のソ連邦諸国へ。中でも憧れだったウズベクには、「草原の王都/サマルカンド」と題しての放映でした。

一般人に扉を閉ざしていたソ連邦の辺境だったので、西域大好きの小生には、その地に行けるようになろうとは、夢のまた夢。それが、近年になって、(株)西遊旅行が現地へのツアーを出し始めていることを知るに及んで、矢も楯もたまらずに参加申し込みを。昔は、ツアー参加の場合にも、その後に別途、現地滞在とか、近隣国を経ての帰国だったのですが、78歳ともなりまして、慌ただしいこと也有ったので、直行・直帰の旅でした。

以下、現地写真を中心として、ウズベクの遺跡と人々、自然をご覧頂ければと思います。

(写真の多い拙稿では、各ページをA3でご覧頂くことを前提の解像度です。どうぞ、拡大してのご覧を。)



ウズベキスタン国旗



現地での行程(西遊旅行社)



### ウズベキスタン到着から、北西部のウルゲンチ・ヒヴァへ

大韓航空機で首都タシケント着陸の前、今はほぼ干上がったアラル海に注ぐシル・ダリア(河)を越えて着陸。国営航空に乗換えての、この旅の始まりは、ウズベキスタン航空機内から。

民族構成はウズベク系が最多の多民族国家で、逊ニ派ムスリムが中心ですが、ソ連邦時代に宗教への規制が厳しかったこと也有ってか、女性の服装もご覧のようだ。右は国内旅行中の若い人達。



国内便で到着のウルゲンチから、古都ヒヴァへ。左は、現地の日本語ガイドさんとその友人。モスク(イスラム寺院)では、サマルカンドブルーといわれる、精緻なタイル模様が見事です。



ホジャ・メドレッセの、国内最大高さのミナレット(塔)。最上部の窓位置まで、内部には螺旋階段が。近くで逢った、母子。以心伝心の会話で、手でハート型を作ってくれたりの、仲々の愛嬌でした。



対称性重視のイスラム建築です。左の4本のミナレット(チャルモスクの塔)や、ホロハウスモスクのドーム内部では、壁面も天井も見事な幾何学模様。乾燥地ゆえに、水が重視されます。20本の柱は胡桃との由。



←：同行の片山さん撮影

左は、ブハラの中心部にあって、幾世代にも亘ってのアミール(王)の居城の門。かつては、その塔から政治犯などを落として殺したが、今は綺麗に修復されて、観光地に。写真は修復前の姿(城内での展示)。

下は、夕暮れ迫る城内と、ボランティア兼ご自身の趣味での、観光客に人気の、武人の姿。





再びアム・ダリアを渡って、ブハラの各地



アム・ダリア(河)は、シル・ダリアと同様に、アラル海に注いでいた大河。ソ連邦時代に、上流での大規模農地開発・取水で水量が激減し、アラル海の減水・沙漠化を招いたものですが、それでも、この辺りでは、ご覧のように豊富な水量。上は、紀元前2～3世紀のアヤズ・カラ都城趾。煉瓦片などが散乱。

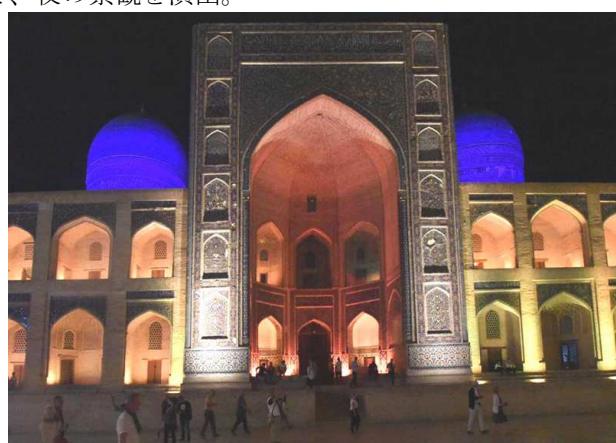
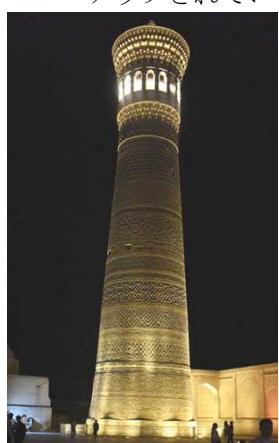


ミーリ・アラブのマドラッサ(神学校)。その広場で、お隣りのカザフスタンからの女性に逢いました。青い布をスカーフ代わりに使っておられ、「あれはカザフの国旗?」と、思わず声をかけましたら、やはり。カザフは、30年以上前に、JICAの仕事で2回滞在。当時は、ソ連邦瓦解直後の大変な国でしたが、聞けば、随分良くなっている様子でした。昔のことを色々話しておきましたら、「是非来て下さい」との。

夜になって、有名店「オールドブハラ」で、食事と併せての、民族舞踊ショーを。



のどかに夜が更けていきました。帰路、カリヤン・ミナレットや、ミーリ・アラブのマドラサが、ライトアップされていて、夜の景観を演出。



今回は、山や自然の紹介まではいきませんでしたが、ウズベクは、歴史に残る当時も今も、街を離れば、どこまでも続く沙漠と、碧空の下の山々と自然。人々との気軽な会話も愉しみつつ、彼の地を堪能して参りました。

冒頭ページ右上の、「個人投稿」  
頁数制限により、続きは2026年に。

昨年の『やまと』Web閲覧版では、40数年前に訪問・滞在(仕事としては初の外国)の、オマーン再訪のこと を紹介させて頂きました。下は、この秋の学会講演要旨ですが、簡潔で分かり易いかと思いまして、こちらにも。

### 【ご興味のかた、どうぞお越し下さい】

日本山岳文化学会 第22回大会 2025.11.29 セッションII 一般口演

当日の参加・聴講は学会会員が前提ですが、

それ以外でご希望の場合は、事前にご連絡下さい。予稿集全26p.をお渡します

## 海のシルクロード」の地、オマーンの40年間

長岡 正利

演者は、40年前(20歳台後半)に、JICA(当時、「国際協力事業団」)の仕事で、アラビア半島東端のオマーン国に5回行ったのですが、昨年2月に40数年ぶりに出て来ました。当時は、国を開いて10年。新しい国王のもとで、明治の日本を想わせるような、気概に満ちた国でした。かつては、腰に短剣<sup>スルタン</sup>を佩して颯爽と(下写真)。今、その様な姿の人を見かけることはさすがにありませんでした。その自然は、当時も今も、街を離れれば、どこまでも続く沙漠と、碧空の下の山々の国です。ここでは、300枚程の写真スライドで、かの地の昔と現状、自然をご紹介します。



内陸の古都・ニズワ。男だけが、の眼鏡。その族長と息子さん。 今は内陸山間でも夫婦同伴が普通。上は首都マスカットでの。



上のニズワの古城址43年前と昨年・案内娘も。昔、200年前に米国へ大使を送ったダウ船など遺物が散乱。今、ダウ船は観光用に。

この地は、BC30世紀頃から「マカン」と呼ばれ、メソポタミアへの銅の供給地(精錬所跡遺跡あり)として知られ、精錬の用に供するレバノン杉<sup>サイド</sup>のような巨樹が茂っていたと思われます。

10世紀には、全イスラムにおける最も繁栄を極めた港として知られ、この時期、オマーンの海上勢力は全インド洋の交易を支配し、そのダウ船は中国・廣東にまで達しました。しかし、その繁栄は長続きはせず、1869年スエズ運河経由の蒸気船運行によって閉鎖的な経済状態となっていました。

しかし、1970年代以降は、前代国王カブース・ビン・サード(2020年崩御)によって内政と外交改革が進められ、石油収入も相まって、近代的な国作りが進んでいます。



アフダル山脈の南東麓。茶褐色部が異地性のオフィオライト。 山間内陸に見る単斜構造の石灰岩。 その豪椰子林内の灌漑水路。

同国を特徴づける地形は、北東側の海沿いに湾曲して連なる平野と、背後のアフダル山脈(3000mに達す)、その内陸側に拡がる沙漠地帯です。山脈の稜線部は、山脈を形成した背斜軸に一致し、山脈を構成するのは、石灰岩を主とする中・古生層です。それらのこと、スライドで詳しくご説明を。